

「文化の戦士」という生き方 『言葉にささえられて』（廣木寧著）を読んで

川村 雄規

廣木さんの文章は不思議だといつも感じる。ある文学者の文章を引用して評論をし、そして次の文章を引用する。

これが引っかけりなく流れていく為、その文学者の生き方、考え方を彼らの文章を通じて理解した気分になる。評論とはこういうものなのだろうか。廣木さんと二人三脚で文学者の内面に迫っていくように読み進められる。これが私には不思議な感覚なのである。「他人の言葉を利用して自分の意見を言うことはよくないことだ」と廣木さんが以前どこかでおっしゃっていた言葉は私にふと思いついた。廣木さんの文章は他人の言葉をその思いのままに伝えることを徹底しているのではないだろうか。

今回『言葉にささえられて』を読み、まず率直に感じたのは、夏目漱石、森鷗外、小林秀雄、江藤淳という文学者たちについて、自分は彼らの「作品」

を知っているが、彼らの「生き方」については知らなかった。ということである。その思いに到った本の中のいくつかの文章を簡単に紹介したい。

夏目漱石は生まれてすぐに養子に出された。漱石七歳（数え八歳）の頃、養夫婦は養父の浮気が原因で仲が不和となり、始めは養母と二人で暮らし、後に養父に引き取られる。ただ、その家には養父の浮気相手とその娘も同居していた。養夫婦の離婚が成立した後、漱石はもう一度実家に引き取られることとなった。しかし、漱石は実の父母を祖父母と教え込まれ信じていたのである。「本を読むとは、正しく生きることを学ぶ渾身の行為であった」と作品中にあるように、大人達の間を転々と過ごした漱石にとって、大人達への不信から脱する一筋の光が渾身の読書であった。そしてこれが漱石の文学の基礎となったのである。また、大人になった漱石は精神界や文化などあらゆることが西洋流になる明治の時代に生きる中で、「平和の戦争」で日本の独立を果たそうとした。「平和の戦争」とは文学である。漱石は「文化の戦士」だっ

たのである。これらのことを私は恥づかしながら初めて知った。夏目漱石という名前は知っていても、一人の人間として知らなかったのである。

小林秀雄、江藤淳も敗戦後の日本で言葉に向き合い戦った人物である。作品中のある場面が私には非常に印象的だったので紹介したい。小林秀雄が亡くなり、その通夜の帰り道に江藤淳は通夜の参列者が心なしか少ないと感じていた。それはなぜか。小林秀雄の人生が「いつも絶対的少数派であったこと」と関係していると江藤淳は悟り、涙を流すのであった。戦後、大きく変節する日本の中で、小林秀雄は文章を書くという事で「戦い」続けていたのである。何と戦い続けたのか。それは敗戦後の日本で反省を強いる人たちとの戦いである。敗戦と共に過去を断罪する側にまわった多数派との戦いである。小林を想い流した江藤淳の涙から、私は小林秀雄や江藤淳が少数派として戦ってきたということをはっきりと認識した。

小林秀雄の人生に対して涙を流した江藤淳は晩年に脑梗塞となり、かつて

のように文章が書けなくなった。そして江藤淳は自死という道を選択した。「江藤淳の主戦場は文学の世界である。そこで従前の高さの仕事はできぬ」と江藤は『処決』し、『形骸を断』じたのである。」と廣木さんは表現されているが、江藤淳にとって文学とは戦いの場だったことは、この場面からも感じられる。

どうも私は文学を勘違いしていた。文学とは芸術に分類されるものであり、エンターテイメントに近いものと思っていたのかもしれない。しかし、『言葉にささえられて』を読み、その考えは一蹴された。「文章」や「言葉」とは作品中の言葉でいう「人々の思惑ではどうにもならぬ独立の生を営んでいるもの」であり、「言葉」を主戦場として「てにをは」にさえ推敲を重ねた多くの文学者がいた。そのことをこの作品は私たちに気づかせてくれる。

言葉を「使っている」と錯覚していたが「言葉にささえられて」いることを読了後に痛感した。